

鳥取県立白兔養護学校		
中長期目標 (学校ビジョン)	人と関わりながら自立と社会参加に向けて努力する子どもの育成	<div>白兔のあいうえお</div> <div>あ いさつを交わし みんななかよく</div> <div>い のちはひとつ 自分も友達も大切に</div> <div>う んどうをして 健康で元気な身体</div> <div>え がおいっぱい 楽しんで学ぶ学校</div> <div>お もいやりのある 豊かな心</div>
今年度の重点目標	<div>・人と関わりながら豊かに生活する児童生徒の育成</div> <div>・確かな学びにつながる学習指導の充実</div> <div>・児童生徒の健康と安全を守る教育の推進</div> <div>・知的障がい教育の専門性の向上・発揮</div> <div>・お互いを理解し、高め合い、協力し合う教職員集団の実現</div>	

年 度 当 初						評価結果（ 9 ）月		
評価項目	評価の具体項目	学部学級	現 状	目標（年度末の目指す姿）	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
1 人と関わりながら豊かに生活する	・地域との連携（地域や人につながる）	小学部	○児童が自分の思いを自分なりの方法で表現しようとする意欲を育てることや、職員や友達、身近な人と関わる経験を重ねられることを目標とし、児童一人一人の実態に合わせた授業実践に取り組んでいる。	○教職員が児童のアセスメントをもとに、また成長や変化を把握し、授業内容を選定して展開を工夫することで、児童が主体的に教職員や友達、身近な人と関わろうとする姿が増える。	○学部会、学年会、長期休業等に研修会等を設定して、児童が自分の思いを自分なりの方法で表現しようとする意欲を高めるための指導・支援の工夫について、研修・理解を深める。（学期に1回程度、教職員同士の普段からのコミュニケーション）。	○教員間で、児童が表現しようとする意欲を高める情報共有（相談や教材を見合う等）ができています。 ○学部内でのミニ研修は、3回実施できた。学年会でもミニ研修を実施している学年があった。 ○情報共有やミニ研修を生かしたことで、身近な人と関わろうとする姿が以前より増えている。	B	○評価の観点を明確にした実践をさらに増やす。 ○内容や時期を考慮した研修計画をしっかりと立てる。
			○保育所や小学校、特別支援学校との学校間交流等、児童の実態に応じた交流及び共同学習の実施内容を検討している。	○交流及び共同学習を通して、自校以外の児童と関わり、自発的なコミュニケーションをとって活動することを楽しんでいる。	○交流相手となる学校等と連携を図り、交流及び共同学習の目的を共通理解し交流内容を検討した上で、双方が無理なく安心して実施できるようにする。	○学校の活動について、互いに紹介し合う活動の設定をした。 ○居住地校交流については、児童が安心して活動できるよう、相手校と児童の実態等も含め活動内容を検討できている。リモートも活用し、無理なく実施している。児童は楽しみながら、交流を行っている。 ○学校間交流については、相手校と密に連絡をとって内容を検討したことで、楽しみながら交流ができています。	B	○次の交流に向けて、交流後にはその都度、相手校と振り返りを行い、保護者の思いも反映できるよう検討を行う。
			○地域の自然や施設利用体験、地域の人材を活用した学習等に取り組んでいる。（主に中学年以上）	○学習活動の中の「白兎のご縁プロジェクト」等で地域に目を向け、児童の発達段階に応じた教材や自然とのふれあい、体験活動を取り入れた実践をしている。	○地域の自然、施設利用体験、地域の人材を活用した内容や、「白兎のご縁プロジェクト」等を取り入れた学習活動を各学級1回以上実施する。	○「白兎のご縁プロジェクト」でのスタンプラリーを行った学級が多数あった。散策を通して、白兎の地域に触れた。 ○プロジェクトに関連した生活単元学習「白兎を知ろう」「白兎の海をつくろう」「白兎の海で遊ぼう」の学習を設定した。海や川にいる生き物について学習したり、見つけた貝殻で作品を作ったりすることで、地域と触れ合うきっかけになった。	B	○生活単元学習は単元を設定して、教科を含む学習を行うため、学習の目標に迫ることができるようにねらいを明確にした授業計画を組んだり、地域に関する内容を特別活動に取り入れたりする。
	・地域との連携・仲間と深くつながる	中学部	○教科学習や合わせた指導の学習の中でグループ作りや生徒同士が関わる場面を設定することで、生徒自身が声を掛け合ったり、お互いを意識したりして活動する場面が見られるようになってきている。	○体験的な活動を通して、自分の思いを伝え、仲間と関わりながら目標に向かって活動している。	○総合的な学習の時間において、生徒自身が取り組んでみたいことを吸い上げ、学習内容や場面設定を工夫することで、興味関心を広げたり、生徒同士の関わりを深めていく。	○生徒たちがテーマを考え協力しながら調査したり、得意なことを披露するときに生徒がアイデアを出し合ったりすることにより、生徒同士が関わりを深めながら学習に取り組む場面が見られた。	B	○引き続き、生徒自身が取り組みたいことを吸い上げ、興味関心を広げる学習内容を設定していく。
			○地域の方とのスポーツ大会や湖東中学校との学校間交流において、直接交流することで、生徒自身が交流内容を工夫する姿も見られ、お互いの理解が深まる交流ができてきている。	○「白兎のご縁プロジェクト」や学校間交流において、学習してきたことを生かしながら実際に地域や地域の方々や湖東中学校の生徒との関わりを深めている。	○生徒が人との関わりを広げたり、地域への関心を深めたりできるような学習内容の工夫や交流での活動を行う。	○やり方やルールがわかりやすいスポーツを設定し、活動の中で生徒の役割を設けた。繰り返すことで、生徒自身余裕を持って地域の方とやりとりをしながら楽しむことができた。	B	○引き続き「白兎のご縁プロジェクト」の地引き網体験や、湖東中学校との交流において、地域との関わりを深めていく。
	・地域との連携・協働の推進と拡大	高等部	○公民館や県庁、ねんりんピック、道の駅での販売活動を通して、地域の方と関わりを持つことができ、つながりを深めることができた。 ○「白兎のご縁プロジェクト」の活動を通して、さらなる地域とのつながりが深まることが期待できる。	○「白兎のご縁プロジェクト」や青谷高校、湖陵高校との学校間交流の活動を通して、学校での学びを生かしながら活動し、地域及び地域の方々、同世代の仲間とのつながりを深めている。	○昨年度に引き続き公民館、県庁での作業製品販売や公民館の清掃活動を実施する。生徒主導の活動になるよう、できるだけ生徒の考えやアイデアを反映する。 ○青谷高校、湖陵高校のとの交流において、人との関わりを深めることができるよう活動内容を吟味する。	○公民館、県庁、道の駅で販売活動を行った。販売活動を通して人との関わりを持つことができた。 ○青谷高校、湖陵高校との交流を行い、少しずつ互いを意識して活動できるようになってきている。	B	○生徒の意見が出るように意図的に活動を仕組んでいく。 ○ペアで活動するなど、活動を工夫して深い交流ができるようにする。
			○学部会や校内研修で進路研修を行い、本人、保護者へ説明ができるようになってきた。さらに研修等で職員の理解を深め、進路指導の充実に努めていく必要がある。	○地域社会での経験や進路に関する情報を基に、生徒、保護者が卒業後の生活をイメージしながら進路について考えている。	○教職員一人一人が「進路の手引き」の再確認を行う。本人、保護者に進路説明及び助言等ができるように、学部会等で進路に関する研修を設定する。	○学部会で、本校生徒の進路先や進路指導の進め方について研修を行った。	C	○引き続き、学部会等で進路研修を行う。グループに分かれて研修する等内容を工夫し、教職員の共通理解を深め、本人や保護者へ内容を還元できるようにする。

年 度 当 初						評価結果（ 9 ）月		
	評価の 具体項目	学部 学級	現 状	目標（年度末の目指す姿）	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
1 人 と関 わりな がら 豊か に生 活す る	・病院、 家庭、関 係機関 等との連 携と仲間 とのつな がり	訪問 学級	○病院スタッフと、行事、感染対応、緊急時および災害時の対応について連携を深めているが、情報共有が不十分な部分がある。 ○日々の授業をより安心安全に行うために、家庭、関係機関との連携を継続的に図っていく必要がある。	○児童生徒の実態やニーズを病院、関係機関、家庭と共通理解しながら日々の学習や行事等の充実を図る。	○児童生徒の日々の様子を、日常の機会や、情報共有の会、支援会議等で伝える。また、確認すべき事柄を職員間で検討し、機会を捉えあるいは機会を設定し、関係者との確認や情報共有をする。	○学習の様子や確認事項など、その都度病院、家庭と情報共有しているが、日々の対応等についてきめ細やかに確認をとっていく必要がある。	C	○確認事項についてより迅速に情報発信、情報共有をしていく。
			○リモートを活用しながら訪問学級の児童生徒同士で関わるができる授業を取り入れている。リモートを活用した本校の児童生徒との関わりも行事を中心に少しずつ増えてきている。	○リモートを活用した学習において、友達や教師などの関わる人々とつながっている雰囲気を感じて画面の方に視線を向けたり、友達の様子を受けて言葉や身振りで応答したりと関わりを楽しむ姿が見られる。	○児童生徒の実態に合わせ、学習内容がより伝わるように、環境設定、声かけ、提示する教材の工夫をする。	○リモートでの学習時に、集団の実態に応じた内容構成の工夫をしている。	B	○友達や教師への気付き、関心が高まるように、引き続き内容や支援、教材の工夫を行う。
2 確 かな 学び につ なが る学 習指 導の 充実	・子ども 理解と確 かな指導 支援によ る授業の 充実 ・ICTを効 果的に 活用した 学びの 創造	小学 部	○授業づくりシートを活用するなど、指導目標、評価規準を明確にして授業改善に取り組みつつある。年間指導計画に沿って、各教科の目標に基づいた授業実践を行っている。 ○自立活動の指導の充実が求められる。	○的確な実態把握を行い、児童一人ひとりの実態に応じた各教科等の指導目標、自立活動の指導目標が具体的に設定された授業構成となっている。学習評価が教職員の授業改善と児童へのフィードバックに生かされている。	OPDCAサイクルを意識した授業計画・授業改善等を行う。関係教職員で検討し、指導目標を明確にして、次時の授業づくりにつなげる。 ○自立活動の流れシート作り（研究とのリンク）を通し、自立活動での優先課題を明確にした授業実践につなげる。	○自立活動の流れシートについて、学年会で実践の共有をした学年があった。 ○対象児の自立活動の流れシートを学年団の教員と話し合いながら作成した。 ○生活単元学習計画書で、評価規準を明確にするとともに、職員間で共有して授業づくりをした。 ○自立活動の流れシートの作成で、優先課題が明確になったことで、ゴールを見据えた実践に繋がる授業が増えた。	C	○自立活動では、自立活動の流れシートについて一人一人が十分に理解することができるよう、研修を通して理解を深める。 ○教科学習のねらいに対して、しっかりと評価基準を立て、的確な評価を行う。
			○児童の実態に応じて、読み書き、計算、金銭の取扱い等に関するアプリを活用し学習を行っている。 ○タブレット端末を活用して必要な情報を検索したり、児童個々の意見を全体に表示して共有したりした。	○国語や算数等の授業において、児童自身がICTを必要な場面で活用して学習に取り組んでいる。	○教職員のICT活用に対する苦手意識の軽減を図るため、校内の人材を活用して、ICTの効果的な活用方法、活用場面について校内人材によるアドバイスや実践事例の紹介を通し、実践を行う。	○算数や国語の学習時間にタブレットを活用した学習（カフト）に取り組んだ学級がある。 ○ICT機器の活用について、教員の活用意識は高まっている。 ○便利機能について、ミニ研修（有志）で紹介し取り組みが広がった。	C	○効果的な活用の実践事例を紹介する機会を、計画的に設定（学部会、学年会等）する。 ○普段から伝え合えるよう、適宜学部主事や学年主任が所属職員へ声をかける。
		中学 部	○自立活動において個別の目標設定の改善が必要である。	○自立活動において目標設定の方法を理解して、目標ごとによるグループを構成し、学習内容を設定する。	○学部研究を中心に、流れシートを作成し、目標設定をする。実践してみても有効な学習内容や支援を学部全体で共有していく。	○校内研究でのグループごとに、流れシートを作成し、具体的な学習内容を共通理解し授業実践を行っているグループもある。 ○グループ自立において学部でアンケートをとった内容を共通理解した。	B	○有効な授業実践における支援を学部内で共有することが必要である。 ○学級での自立活動、グループでの自立活動において流れシート作成による目標を元に取り組む必要がある。アンケートを基に学習内容やグループ編成の工夫が必要である。
			○生徒の実態や状況を、関わる教員で共通理解し、課題学習や調べ学習、学習の振り返りのまとめ等においてICT機器を効果的に活用することができてきているが、使用時のルールの点検や、見直しが必要である。	○タブレット端末の使用時のルールを守り、実態に応じて、生徒自らICTを活用して学習活動を行っている。	○タブレット端末の使用において、使用時のルールの確認や点検、見直しを行っていく。	○タブレット端末の使用時のルールの徹底が十分ではなく、生徒によってルール遵守の度合いにばらつきがあった。（機器の破損や起動時のパスワード漏洩等） ○学習内容の定着や、学んだことをまとめる活動において、タブレット端末を活用する場面が増えてきている。	C	○生徒の実態に合わせたルールを検討し、設定する。 ○安全に使用する軸となるルールを設定する。（丁寧に扱う・パスワードの管理等）

年 度 当 初						評価結果（ 9 ）月		
評価項目	評価の 具体項目	学部 学級	現 状	目標（年度末の目指す姿）	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
2 確 かな 学 び に つ な が る 学 習 指 導 の 充 実	・子ども 理解と確 かな指導 支援による授業の 充実 ・ICTを効果的に 活用した 学びの 創造	高等 部	○研究で1人1実践に取り組んできたことで、日々の授業において、振り返りをし、教科の視点を明確にすることを意識しながら授業改善を行うことができた。 ○自立活動や課題学習をあり方、考え方をもとに授業改善の必要性が高まっている。	○自立活動、課題学習において、生徒が自らの力を発揮しながら学習できるよう、実践をもとに、授業改善がなされている。	○自立活動の流れシートを使用して実態に即した目標になっているかを学年グループで協議し、より生徒が自らの力を発揮できる授業づくりと授業改善に努める。	○研究で自立活動の流れシートの作成に取り組んでいる。 ○授業改善の方法について、研究部の取り組みの中で検討している。	C	○授業改善に生かすことができるよう、研究を続け、内容をまとめる。
			○1人1台のタブレット端末をおおよそ整備することができた。職員に対する情報研修を行ったことで、学習や生活の中で、個に応じたアプリなどが活用されるようになってきた。	○全学年、全コースにおいて、学習や生活の中で、個に応じたアプリなどを取り入れタブレット端末の活用が促進されている。	○タブレット端末が活用されていくよう学部会で定期的に情報研修を行う。情報教育部と連携し、先進的な取り組みに関しても情報を共有していく。	○学部会で、情報教育に関する研修を行った。様々な学習においてタブレット端末が活用されているようになってきた。	C	○どの発達段階にも応じた活用方法を、情報教育部と連携して研修及び実践を行っていく。
	・つながり と活用 に向けた 作成文 書の整 理	教務 部	○昨年度より、個別的教育支援計画・個別の指導計画（新様式）の本格運用を行い、質問に掲示板や学部教務からの説明、不具合に対してスピーディな対応を行った。教員へのアンケートで一昨年度から始めた出席簿（新様式）は、90％、個別的教育支援計画・指導計画は、85％の「よい、どちらかといえばよい」の評価を得た。教務部の対応は、90％の評価を得ており、おおむね、出席簿、個別的教育支援計画・指導計画の様式に対して良い評価を得て取り組めている。また、自立活動の流れシートを昨年度提案しており、令和9年度の校務支援システム運用開始に向けて全員が活用できるように準備を進める必要がある。	○個別的教育支援計画・個別の指導計画の記入例の修正を行い、円滑な運用に向かっていくと実感する教職員が増えている。 ○自立活動の流れシートと個別の指導計画の関連を示し、使い方のイメージを持つ教職員が増えている。	○個別的教育支援計画・個別の指導計画の記入例を学部の意見を参考にしながら修正する。また、適時、帳簿手入れやデータファイルの在処について連絡を行い、スムーズに使えるようにする。 ○教務諸帳簿の年間の作成計画に自立活動の流れシートを位置づける。特に個別の指導計画の自立活動の目標の根拠となるのが自立活動の流れシートであることと、令和9年度から導入される校務支援システムで全員が取り組むことを教職員に明示する。内容については校内研究と連携する。	○個別的教育支援計画・個別の指導計画ファイルのトラブルや質問に各学部教務が丁寧に対応している。その他の諸帳簿の記入も含めて必要に応じてノーツ掲示板で全体にも伝えている。 ○令和9年度導入の校務支援システムで自立活動の流れシートは児童生徒全員分を作成することを周知したが、自立活動の流れシートと個別の指導計画との関連を教職員がイメージできるまでの具体的な計画を示せていない。	C	○今年度出てきた修正点を諸帳簿記入の仕方に反映する。アンケートを実施して、取り組みの考察と向上を図る。 ○自立活動の流れシートの作成を、諸帳簿の作成年間計画に位置づけ、個別の指導計画との関連も含めて提案する。
	・情報活 用能力 の育成	情報 教育 部	○教室用パソコンをiPadに変更し、指導者用タブレット端末の拡充を進めた。ICTサポート支援員の協力のもと、他クラスの実践の情報共有や学習アプリ情報提供を多くの担任に対して行えた。Apple TVの導入や端末のMDM導入によりアプリのダウンロードが容易となり、活用しやすくなった。 ○一人一台端末やアカウント、ICT機器等の取扱いに関して取扱い要領が煩雑化しており、整理した要領の周知が必要である。	○他クラスや他学部のICT機器を活用した取り組み事例の情報共有が、クラスルーム等の手間で積極的に運用され、活用されている。 ○個人情報や端末機器の取扱いに関する要領が整理され、教職員・児童生徒・保護者等へ周知されている。	○小学部や重複障がい学級でのICT教育の実践をさらに進めるためには、ルールと使い方の定着が必要であり、ICTサポート支援員の協力による情報モラル教育、著作権等の研修・授業支援・端末整備と情報共有をクラスルームや日報等で計画的に行い、各学部・分掌部と連携しながら進めていく。 ○個人情報や端末機器の取扱いに関する要領をICTサポート支援員の協力のもと整理し、周知する。また一人一台端末の設定資料等、特別支援学校間での情報共有を積極的に行う。	○本校のクラスルーム「＜白兔＞ICT教材等データベース」の過去の投稿を参考に、小学部では「すくすくプラス」、高等部でも「ワオっち！ランド」等の授業内でのiPadのアプリ活用が進みつつある。また、ノーツ掲示板で「桃太郎電鉄教育版」等のアナウンスも行い、中学部や訪問学級でもiPadによる学習で活用される予定である。 ○クラスルーム活用に関するルールの見直しを行い、職員会で提案を行う予定である。情報教育主任会を通じて、他校と個人端末設定や個人端末持ち帰りに関する情報共有と方針の確認ができた。 ○夏季休業中にICTサポート支援員と、著作権や生成AIに関する研修を実施できたが、参加者数が少なかったことが課題である。	B	○「＜白兔＞ICT教材等データベース」の内容充実と、児童生徒及び教職員の適切な授業内でのiPad利用促進のため、各学部へのICTサポート支援員の授業参加を強化し、アプリ活用状況の情報共有を進める。 ○個人情報の取扱いに関するICT活用ポリシー資料の策定に関して、ICTサポート支援員の協力を得ながら他の特別支援学校と情報共有を行い、家庭配布を検討する。
			○司書や司書教諭、学部図書館担当が連携して、図書館を活用した学習や読書活動が各学部で進んでいる。 ○現在、全学部の学習を担当する教職員の9割近くが図書館を利活用している実態がある。今後も、教職員や児童生徒の多様なニーズに応じた資料を提案したり、図書館の実践事例やデジジー図書へのアクセス方法についても引き続き情報発信したりする必要がある。	○学習を担当する教職員の9割以上が学校図書館を利活用し、図書館資料（県立図書館等の資料も含む）、司書や司書教諭を活用した教材研究や授業がなされている。	○図書館や図書館資料を活用した学習の提案やイベントを企画する。（図書館オリエンテーション、図書館まつりなど） ○図書館の資料や利活用事例、デジジー図書の活用方法について情報を発信する。（図書館だより、ノーツ掲示板、図書館前掲示板など） ○図書館教育への要望を尋ねる機会を作る。（職員図書購入希望アンケート、図書館利用アンケートなど）	○全学級でオリエンテーションを実施し、その後の活用に繋がった。グループ毎に図書の時間を設定し、本に触れる機会が増えた。 ○掲示板で、季節の絵本や、デジジー図書の活用状況等を紹介し、活用が広がった。 ○職員図書のアンケートやレファレンスシートを活用して、教職員の要望を集めた。	B	○さらに図書館の利用が進むよう、図書の時間における活動内容の工夫や企画を情報教育部と司書で検討する。 ○引き続き、図書活用状況の紹介を行う。 ○引き続き、学部図書担当が学部教職員への図書教育に関する情報共有や図書館活用への情報提供を行い、連携を深める。

年 度 当 初						評価結果（ 9 ）月		
評価項目	評価の 具体項目	学部 学級	現 状	目標（年度末の目指す姿）	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
2 確かな学びにつながる学習指導の充実	・子ども理解をもとにした授業づくり	研究部	○自立活動の目標を、児童生徒一人一人の中心課題に基づいて設定する必要があり、その手続きや指導法に不安や困り感を感じている教職員が多い。	○「自立活動の目標設定の方法がわかり、自立活動の授業に生かすことができたか」との質問に対する肯定的な意見が85%以上。	○学部内小グループで自立活動の流れシートを作成し、授業実践と修正を続ける。設定した目標が妥当かどうかをグループで検証し、授業実践に生かす。 ○自分たちの実践の理解度を上げ、新たな知識を得ることができるよう、自立活動の実践発表を行う。	○夏季休業中に学部内小グループで自立活動の流れシートを作成した。根拠のある目標や指導内容が設定できるよう、各グループにファシリテーター（専門的知識を持つ進行役）を配置することで、目標設定の手続きを正しく学ぶことができた。	B	○自立活動の流れシートで設定した目標を達成できるよう、授業実践と改善を続ける。専門的な知識を得られる研修会を行い、自立活動の授業実践に生かす。
	・命と健康を守る教育の充実 ・心と体を大切にした指導と対応	全学部	○インフルエンザ警報の発令に伴うマスク使用や感染症に関する学級閉鎖の基準の検討などに取り組んだ。 ○インフルエンザ等の感染はあったが、学校において感染の広がりは見られなかった。	○学校における感染症の広がりが最小限となるよう、感染症流行期や季節等を考慮した感染症対策が実施されている。	○感染症流行期や体調を崩しやすい気候を考慮して、適時感染予防や体調管理を呼びかける。 ○手洗いや換気などの日常的な感染症予防を継続するようノーツ掲示板等を通して職員に呼びかける。 ○マチコミでの感染症に関する保護者への情報提供について検討し、必要であれば改善する。	○感染予防・体調管理について学部朝会等で呼びかけを継続している。 ○マチコミでの感染情報提供は保護者・職員の感染予防意識の向上につながることから継続する。	B	○感染情報に注意し、流行期に迅速かつ適切な対応（マスク着用・換気の呼びかけ等）を行う。
3 児童生徒の健康と安全を守る教育の推進	・命と健康を守る教育の充実	健康・安全部	○保健、食育、安全、環境の各分野で研修や訓練等について、従来の研修、訓練のあり方を見直して実施し、教職員一人ひとりが考える機会を設け、安心安全な学校作りに取り組んだ。	○自然災害、感染症、アレルギー等、訓練や研修を通して、教職員の危機管理意識が向上し、学部や学年、クラスで児童生徒個々の特性に沿って安心安全な学校作りに取り組んでいる。	○保健、食育、安全、環境の各分野から児童生徒への学習指導ができるように、教職員に対してノーツ掲示板等を通じて情報発信し、理解啓発を行うとともに、従来の研修、訓練のあり方を見直して、地域と連携した研修や訓練を通して、様々な危機に応じた避難場所の確保や体制づくりを進める。	○学校保健、学校安全に係る研修、訓練は予定通り実施することができた。年度当初の危機管理研修は、本校の実態について共通理解を図るよい機会となった。夏季職員研修は、少人数で話し合いながら、課題を洗い出すことができた。	B	○研修の反省を基に来年度に向けての研修計画を立てるとともに、洗い出された課題については緊急性や容易性の高いものから、順次課題解決に向けて検討を始める。
			○避難訓練や交通安全教室を毎年実施することで、児童生徒及び教職員に対して「自分の命は自分で守る」学習や指導を継続して取り組んでいる。	○各種訓練や学習の中で、防災や感染症について自らのことと捉え、「自分の命は自分で守る」ことの大切さを意識し、学ぼうとする児童生徒の姿が見られる。防災に関する一覧表を作り、教職員に公開することで、一層の共通理解を図り、今後の防災教育に資する。	○専門家等の意見も取り入れながら、昨年度アンケートをもとに、より安全なより安心できる避難となるよう検討する。災害や防災に関する授業の一覧表を作成、同時に資料も収集・公開していく。	○地震・津波避難訓練では校内避難を実施した。初めての試みであり、避難誘導に戸惑う場面もみられたが、児童生徒は整然と避難することができた。 ○本年度より全学部で防災教育を実施し、外部講師を招いた授業や、起震車、煙体験、段ボールベッド体験など、学年や児童生徒の実態に即した授業が展開された。	B	○避難経路や避難誘導、避難場所について、一層の共通理解が図れるようノーツ掲示板や職員会、学部会等の隙間時間を利用して周知する。 ○授業の指導計画や資料等を一括して保管し、次年度以降の防災教育の資料とする。

年 度 当 初						評価結果（ 9 ）月		
評価項目	評価の 具体項目	学部 学級	現 状	目標（年度末の目指す姿）	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
4 知的障 がい教育の専門性の向上・発揮	・チーム で共有し 取り組む 校内支援	小学部	○教職員同士がお互いに協力し合い、学年会（定期）や日常的なやり取りを通して児童の実態について情報共有しながら、学年主任を中心とした指導体制の充実が図られてきている。	○学年主任、担任、学年担任の役割を明確にし、業務を整理し、業務の効率化と教職員間の連携の意識をさらに高め、指導体制を確立して、各学級の児童の指導・支援の充実が図られている。	○教職員間で互いの思いを尊重しながらコミュニケーションをしっかりととり、教職員間でサポートし合う意識（同僚性、協調性）がさらに高まるよう、担任、学年担任、学年主任の業務分担について適宜、学年主任会等で確認や検討をする。学年主任を通じて学部主事が児童の状況を把握し、必要に応じて支援部、SC、SSW等と連携を図る。	○学年内で相談をしながら、担任、学年担任と役割・業務分担をし、児童への指導支援の充実が図られている。 ○非常勤、短時間勤務の教員が多く、勤務時間内での連携の取りづらさがある。その分、その時々の情報交換（普段の会話も含め）を大事にすることができている。	B	○教職員については、普段の対話を大事にしながら、お互いのことを尊重しながら、同僚性・協調性を意識した業務遂行できるよう、学部主事、学年主任が適宜声をかける。 ○児童については、児童数が多いため、学部内での児童情報共有がさらにしっかりと行える方策を検討する。
		中学部	○生徒の小さな変化について、学部内（職朝や学部会）で情報共有し、対応やよりよい方法について理解が進み、指導支援の実施が進んでいる。 ○教育相談や支援会議において、外部機関から得た具体的な指導支援の方法について共通理解し、支援方法の見直しを行っている。	○学部内、校内において小さなことでも見逃さず、迅速に情報共有が行われ、指導・支援に生かされている。	○引き続き、必要に応じて話し合いを行い、改善に向けて職員間での共通理解を図り、支援部や外部機関との連携を深めていく。（6月に副主事より、不登校生徒へのアプローチについての研修を設定。）	○生徒の様子について学年単位で時間を設けて情報共有、対応について共通理解しているが、迅速な対応が必要である。	C	○特定の生徒だけでなく、小さな変化についても共通理解し、迅速な対応を行う。 ○6月行った不登校生徒へのアプローチについての研修を引き続き行う。
			○進路学習において各学年が高等部に向けて卒業後に必要な力をつけるための学習の工夫に日々取り組んでいるが、卒業後の進路についての情報を学部で共有することが必要である。	○生徒や保護者の将来の夢や希望、思いや困り感に寄り添うために、教職員が進路決定に向けて様々な選択肢があることを知る。	○卒後の進路について、教員の理解を深め、生徒や保護者に情報提供ができるよう、学部での研修を行い学年団での共通理解を図る。（7月に進路指導主事より卒後の進路についての研修を設定）	○8月に進路指導主事により卒業後の進路についての研修を行う。卒業後の進路状況や、希望する進路のために必要な力、基本情報について共通理解することができた。	B	○今後も教員の意識付けをするため、中学部としての職業教育について、方向性を共有する機会を設定する。
	・チーム で取り組む 支援、 授業づくり	高等部	○学部コーディネーターや生徒指導担当が情報を集約し、役割分担をしながら、チームで指導・支援を行うことができた。必要に応じて、外部の関係機関と連携することもできた。	○必要に応じて外部機関と連携しながら、学部関係者や支援部に情報が共有され、役割分担しながら指導・支援が素早く行われているとともに、的確な情報共有が行われている。	○情報共有の方法や支援者の役割分担を行い、チームで当たる支援体制を引き続き徹底し、効果的に支援・指導が行われるようにする。	○迅速に役割分担しつつ指導・支援を行うことができおり、情報共有シートの活用により学部内での情報共有もできつつある。	B	○引き続き役割を確認しつつ、指導・支援を行い、学部会等を通して情報共有に努める。
		訪問学級	○在籍する児童生徒の学習場所が異なり、教師が個別に対応しているため、日々の体調の変化、授業の様子や支援等について、教職員間で情報共有することが必要であり、大事にしている。	○日々の学習において参考となる情報（医師、看護師、PT、OT、教職員、家庭からの情報）、学習のねらい、使用する教材、取り組みの成果等について教職員間で情報を共有し、教材や支援の工夫、授業展開の改善等を行い、授業づくりに生かしている。	○児童生徒の体調の変化、支援方法等について適宜ミーティングを持ち、情報共有や対応の検討を行う。 ○授業を見合う機会を持つ。	○児童生徒に関する共通理解事項、学習の様子等について、適宜ミーティングを持っている。 ○授業を見合う時間の確保が難しいが、学習記録を確認したりし、ミーティングでの内容を授業づくり生かしている。	B	○引き続きミーティングを実施する。 ○動画（授業の様子）を活用するとともに、使用した教材や学習上の効果的な支援について、情報共有を行っていく。
		研究部	○自立活動の具体的な指導内容を検討するにあたり、児童生徒一人一人の実態を正しく把握し、その背景を探っていく視点を学ぶ必要がある。	○教職員一人一人が、学んだことを自立活動の目標設定、授業実践に生かしている。	○研究推進や、障がい特性への対応を含めた日々の自立活動の授業づくりに役立つ校内全体研修や希望者対象研修を設定する。 ○研修内容が授業実践に役立ったかアンケートを通して教職員に尋ね、研修計画に反映する。	○大学教授等を招き、全教職員対象の研修会を3回行った。研修内容がどの程度児童生徒への支援に生かせそうかとの質問に、平均96.5%の肯定的な回答を得た。	B	○2学期に、外部専門家による研修会を2回予定している。引き続き、教職員の専門性を高め、自立活動の実践に生かしていく。

年 度 当 初						評価結果（ 9 ）月		
評価項目	評価の 具体項目	学部 学級	現 状	目標（年度末の目指す姿）	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
	・校内支援の充実	支援部	○校内支援の充実に向けて、生徒指導、教育相談、キャリア教育を軸とした支援体制の構築を進めている。昨年度より、児童生徒情報共有シートの活用が広がり、早期対応、解決に繋がりがやすくなっている。様々なケースの課題解決のために、生徒指導と教育相談とのタイムリーな連携はもちろん、課題解決の際に必要なキャリア教育の視点についても共有し役割分担をしながら取り組めるようにしていきたい。	○情報共有シートや各種会議の活用について全職員で共通理解し、課題の早期発見や対応に繋がる校内支援体制ができている。 ○課題を抱える児童生徒の教育的ニーズを明確にし、役割分担をしながら課題解決に取り組むことができている。 ※上記について教職員の80%以上ができていると回答している。	○情報共有シートや各種会議の活用、課題解決の事例等、機会がある毎に教職員に紹介をする。 ○児童生徒についての的確な実態把握と教育的ニーズを把握するために、校内研究や職員研修、エキスパート教員等を活用し、ケース会等で課題の本質を共有できるようにする。 ・支援部研修の実施 ・エキスパート教員、校内の特別支援教育の専門性がある教員の活用	○情報共有シートの記入や各種会議等について、職員会やノーツ掲示板等を使って教職員に紹介した。 ○早期にケース会を実施し、その後の支援に繋がった。 ○関係者会議や支援会議の開催等）また、エキスパート教員を活用し児童生徒の抱える課題の本質の共有に努めた。 ○外部専門家（OT）による第1回支援部研修（希望者）を実施した。参加者アンケートで、全員研修の要望が複数あった。また、各学部で進路担当による進路についての研修を実施した。 ○教職員アンケートを実施し、80%以上が校内支援体制について理解し、課題解決に繋がっていると回答したが、回答率が半数に満たなかった。	B	○校内支援の仕組みについては教職員で共通理解できてきているが、実際に活用できていなかったり、相談できていないという教職員の意見もある。課題解決の事例等の情報発信やさらに、担任、学年主任等との日頃の情報共有に努める。 ○教職員アンケートについては、アンケート期間や呼びかけ方法等を見直す。
	・特別支援教育のセンター的機能の充実		○特別支援学級の児童生徒の環境調整等の具体的な支援方法、特別支援学校の学びについての情報提供等の相談が増加している。 ○就学前の体験入学や学校見学の人数は増加しているが、園からの相談件数は少ない。	○特別支援教育の専門性が発揮できるように、教育相談や研修会でニーズに応じた校内資源を活用している。 ○教育相談や体験入学、学校見学等で園や保護者の方に、就学や指導・支援に関して丁寧な情報提供をしたり、園参観を行ったりし、80%以上が参考になったと回答している。（体験アンケートより）	○特別支援教育研修会で、地域の園や高校の職員についても研修対象を拡大し、ニーズに応じた研修を行う。 ○適切な就学先決定を支援するため、体験入学の前後に希望に応じて園を参観したり学びの場の情報提供をしたりする。	○特別支援教育研修会については、保育園や高校からの参加があり、ニーズに応じて講義を選択制にしたり小グループの相談会を行ったりした。 ○体験入学の前に園訪問をし、園児の様子を観察したり体験等への情報提要进行をしたりしてつながりを持つことができた。 ○第1回体験入学では、80%以上の保護者や担任から学部概要や施設について参考になったとの回答があった。	B	○特別支援教育研修会には、中学校からの参加がなかった。参加しやすい研修方法を工夫する。 ○体験入学希望者が増加している。来年度に向けて、体験入学の方法等について検討する。
5 業務改善の取り組み	・職員一人一人の時間外勤務の削減	全学部	○令和6年度に行った勤務実態調査で、授業におけるMT・STの割合に偏りが見られた。校務分掌によって授業数は異なるが、持ち授業時間のMT・STのバランスを半数とするような工夫が必要である。	○各職員の授業持ち時間のMT・STの割合が50%に近づいている。	○学習を計画する際に、MT・STの割合が偏らないように役割分担を工夫する。 ○学習内容に合わせて授業形態や教職員の指導体制を検討する。 ○勤務実態調査を年2回程度行い、検証する。	○業務カイゼンに向けた実態調査を行い、職員の授業持ち時間の実態把握を行った。回答者の42.4%が授業の持ち時間のMTの割合が50%以上と回答しており、業務の偏りが顕在化した。	C	○調査結果を踏まえて、各学部に合わせた指導体制の見直しを行う。
			○定時退勤に取り組む意義について、職員に周知し、定時退勤日に定時退勤する職員が増えてきている。 ○学部の実態に合わせて定時退勤日を設定するようにする。 ○繰り返し行う業務について、標準的な手順をマニュアル化したり、記録を残したりするよう呼びかける。	○定時退勤日に80%以上の職員が17時半までに退勤している。（年間12回以上）	○計画的に業務を行い、定時退勤日に退勤できるように設定した日にちを早めに周知する。 ○定時退勤日に時間外業務を行わざる得ない職員の業務について丁寧に聞き取り、校務分掌等の見直しを適宜行う。 ○校務分掌のあり方等を見直すきっかけとして、聞き取りやアンケートを通して時間外勤務の業務内容を把握する。 ○業務の効率化を進めるための研修を設定する。	○5月から9月までの8回実施の内、80%以上の職員が定時退勤を実施した回数が5回であった。 ○定時退勤の実施ができない職員への管理職による聞き取りを継続的に行った。		○定時退勤日の早めの周知を継続する。 ○定時退勤が実施できない理由について分析し、役割分担の見直しを行う。

評価基準 A:十分達成〔100%〕
 B:概ね達成〔80%程度〕
 C:変化の兆し〔60%程度〕
 D:まだ不十分〔40%程度〕
 E:目標・方策の見直し〔30%以下〕